

戦争がない世の中がいに決まってる 未来に伝える平和への想い

疎開目的は戦力養成 辛酸体験を風化させるな

1944年8月から東京都など8都市で始まった学童集団疎開。翌9月の調査では、疎開した学童数は43万人にものぼりました。疎開先でのホームシック、飢え、いじめ、性病、教師の体罰等の異常体験を踏まえ、平和の大切さを訴え続けている人たちの活動を紹介します。

学童疎開資料センター(以下センター)を存じでしようか。その名のおり学童疎開の資料収集や調査などを通じて、学童疎開を語り継ぎ、平和な世界をつくる活動をしている団体です。

現在、会員は約100人で、今年の6月29日に第4回総会が赤坂区民センターで開催されました。同センター代表の小林圭介さん(86歳)は、22年前の本紙(1996年9月1日号)に学童疎開について

その時は、センターの前身である全国疎開学童連絡協議会の副会長・調査部長としての寄稿でした。総会の後、小林さんは「学童疎開をどう伝えていくか!」というテーマで講演。荒川区にあった第一曙里国民学校6年生の時の1944年8月から6カ月間、福島県に集団疎開した自身の経験を踏まえ、学童疎開の歴史や実態、またそれを伝えることの意義について話してくれました。

という単純なものではなく、防空の足手まといをなくし、次代を担う戦力を養成するための国策でした。でも、経済的理由や身体に障害がある子どもたちは、除外となり疎開できませんでした。

帰京した日に空襲 卒業証書はガリ版刷

当時の新聞やラジオは、こぞ子どもたちの元気な姿を報道しましたが、実際は疎開先も食糧不足だったため、

サツマイモの蔓(つる)や大豆の油かす、紫色に変色したジャガイモばかりで、いつも空腹状態。甘いものに飢えて、練り歯磨きや絵の具をなめる子までいたそうです。



講演をする小林さん

だが、その日は大雪が降っていて、朝から艦載機の爆撃、夜はB29の空襲があり、校舎の半分が焼失。卒業証書も焼けてしまい、ガリ版刷りの証書でした。3月10日に東京大空襲があり、帰京した多くの6年生が犠牲に。何のための疎開だったのかと感したそうです。

母の愛にただ感謝 過ち二度と繰り返すな

【西多摩 配管・丹野俊彦記】今から78年前、私が生まれた頃に第二次世界大戦が始まった。物心がつくにつれ、戦争は激しさを増していく。空襲警報のサイレンの音に、恐怖が身に迫る。遊ぶことも泳ぐこともできない。海は目の前にあっても、戦闘機が低空で奇襲攻撃をし



丹野さん

夜も昼もなく防空頭巾と、どんざ(破れたボロ口を縫い合わせた着物)に身を包み逃げまどう。母の手が強く私を引っ張ってくれる。空中戦が起こる。火を噴き落ちて行くのが見える。もう歩けない。B29の音に気を失う。

母は重苦に泣き叫んでいた。赤紙一枚で「お国の為」と長男を兵隊にとられ、次男は栄養失調で兵役を逃れたものの、国のためになれない子どもを産んだのは恥とされたのだ。戦争が激しくなるにつれ、小さな村には兵隊の死亡の知らせばかり。無事を祈るだけが日課だった。戦争は、権力・欲望がもたらす卑劣極まりない行動。戦争の後に残るのは不幸だけ。2度と起こしてはならない。唯一の被爆国である日本は、世界に向けて憲法九条を永遠に守る決意を訴えるべき。立ち上がろう、みんなで戦争反対の声高く。

記事読み池谷さん訪問 見学し感慨無量の吉野さん

45年の2月25日に中学進学のために6年生は帰京しました。昨年8月20日号で、第二次世界大戦時に武蔵村山市内にあった東京陸軍少年飛行兵学校元職員・池谷たかさんの記事を掲載。その記事を読んだ、当時飛行兵学校にいたという吉野昭さん(89歳・江戸川支部)が、昨年、池谷さんを訪ねました。今回はその時のお話を伺いました。

【吉野昭さんの話】

昨年、「けんせつ」を読んでいると、73年前の少年飛行兵学校の記事が目にとまりました。昭和19年4月に第18期生として私が入校した、北多摩郡村山村(現在は武蔵村山市)にあった東京陸軍少年飛行兵学校と分かり、さっそく支部経由で連絡先を教えていただきました。

9月3日に、記事本人の池谷たかさん宅を訪問。お会い

して、当時の話などをするのができ、とても懐かしく感激しました。当時兵学校内は、女性禁制と思っていました。池谷さんが元職員として勤めていたとのこと。昔話の雑談をした後、街へ出かけました。兵学校周辺を車で探しましたが、昔の面影は全然ありません。あの少年期に命を捧げた兵舎、すぐ裏にあった広大な練兵場はどこへ消えてしまったのか。

今は平和な住宅が建ち並び、街行く人は皆、幸福を謳歌しているように感じます。片隅に、東航正門跡の石碑と揺籃(ようらん)之地の石碑が建立してありました。武蔵村山市立歴史民俗資料館分館は、郷土の遺産を保存し、展示活用していくことを目的に、池谷さん他2人より寄贈された土地に建設し、平成28年9月に開館されました。すぐ近くに手作り、郷土料理の店「翔」があり、隣に先輩の遺品、写真、昔使用した食器など、当時を懐かしく思い起こす貴重な資料が部屋いっぱいあり、私は見学して感慨無量になりました。

昭和19年7月にはサイパン島を失い、11月にB29が立川上空を偵察飛行で通過後、爆撃も日増しに増え、全国に無差別空襲が広がりました。飛行学校も20年2月、期末試験の最中に重爆撃を受け、学校周辺の高射機関砲などで



疎開先に着いた学童たち(小林さんは右から2人目)

日本では、学童疎開は43年まで具体的に進めることはしませんでした。当時の政府の支配層は、天皇を国父と仰ぎ国民は子どもを含めて天皇の赤子(せき)であるとの家族主義国家観を持って戦争を進めていたからです。しかし、戦局の悪化に慌てた政府は、地方の親戚の家などに行く縁故疎開を奨励。行政の責任や公費負担を回避するためです。しかし、思うように進まなかったため、44年6月に、政府は「学童疎開促進要項」を閣議決定し、学校ごとにまとまって地方へ行く集団疎開を強く推進。目的は「子どもたちを避難させる」



吉野さん(奥)と池谷さん

我々は現在、繁栄の中に生活しています。でも、その陰に各地の戦場で散華していった多くの先輩、当時の青少年の熱い気持があったことを忘れてはならないと思います。